

顔の呈示が声の記憶に与える影響

Effect of face presence on memory for a voice

笠原洋子¹⁾、越智啓太²⁾

Hiroko KASAHARA¹⁾, Keita OCHI²⁾

E-mail: kasaharah@edu.i.hosei.ac.jp

和文要旨

顔隠蔽効果 (face overshadowing effect ; 以下、FOE) とは、顔と声と同時に呈示されることにより、声の記憶が損なわれる現象を指す。本研究は、FOEの再現性を確認するとともに、顔を呈示することが発話内容の記憶にどのような影響を与えるのかについて検討することを目的とした。実験参加者は、顔+声呈示条件または声のみ呈示条件 (刺激のビデオが呈示されている間、目を閉じている) に無作為に割り当てられた。刺激として、男子大学生が短い文章を読んでいる様子を写したビデオを用いた。ビデオの呈示終了後、ボイスラインナップを呈示し、参加者はその中からターゲットを選択して、5段階でその確信度を評定した。また、発話内容の再認テストも実施した。その結果、FOEは生じず、顔+声呈示条件のほうが発話内容の再認記憶がよいことが示された。またターゲットを正確に同定できた人のほうが、確信度が高いことが示された。本研究から、顔を呈示したほうが発話内容の記憶想起が促進されることが示唆された。

キーワード： 顔隠蔽効果、声、記憶、確信度

Keywords : face overshadowing effect, voice, memory, confidence

1. 緒言

相手と会話をする時に、通常私たちは相手の顔を見ながらその人物が話していることに耳を傾け、会話内容を理解しようとする。この時、情報の受け手は発話者の顔と声を同時に処理することになる。このように、対面場面では視覚的情報とともに聴覚的情報が同時に処理されることが多いが、両モダリティ間の相互作用に関する研究は少ない。そのなかで、顔の存在が声の記憶に与える影響として、顔隠蔽効果 (face overshadowing effect) が知られている (Cook & Wilding, 1997 ; 2001)。顔隠蔽効果とは、顔と声と同時に呈示されることにより、声の記憶が損なわれる現象を指す。この顔隠蔽効果に関する研究として、代表的なものに Cook & Wilding (1997) がある。

Cook & Wilding (1997) は、声とともにその発話者の顔や個人情報 (病歴など) を呈示し、

そのような発話者についての付加情報が声の記憶に与える影響について検討を行った。彼女たちは刺激の呈示条件として声のみ呈示条件、声+顔 (ビデオ) 呈示条件、テスト時に声とともに文脈復元情報として顔写真が呈示される条件、声+個人情報呈示条件、テスト時に声と文脈復元情報として個人情報呈示される条件、声+顔+個人情報呈示条件、テスト時に声とともに文脈復元情報として顔と個人情報が呈示される条件、以上7つを設けた。刺激として、男性ターゲットと女性ターゲットの会話音声を使用された。ターゲットは性別ごとに2名用意され、ランダムに各条件に割り当てられた。それぞれの発話は約15音節であった。また各条件には別の実験参加者が割り当てられた。参加者に「これから2人の人物が話すのを聞いて(見て)いただきます。テープは非常に短いので、よく注意して聞いてください」と教示し、偶発記憶

¹⁾ 法政大学 大学院人文科学研究科、Graduate School of Humanities, Hosei University

²⁾ 法政大学 文学部、Hosei University